

# St. Luke's International University Repository

## A Study of Students' Motivation for Selecting a Nursing Program.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西郷, 淳子, 岩井, 郁子, 太田, 喜久子, 操, 華子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/210">http://hdl.handle.net/10285/210</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 本学学生が看護を学ぶことを決定した動機の実態

西郷淳子\* 岩井郁子\*  
太田喜久子\* 操華子\*

## 要 旨

看護の学習をより効果的なものにしていくためには、学生の看護の選択動機が重要な鍵となってくる。つまり、学生達の持つ動機を大切に、効果的な教授-学習活動を行うためには、どのような動機が存在しているのかを明らかにする必要がある。

そこで昭和58年度から63年度の6年間にわたる本学新入学生330人の、看護を選択した動機を、アンケート調査結果から分析した。

回収率は100%で、自由記載回答から一要素一内容に細分化した動機を全回答件数802とし、それらは、大きく2つに分類された。一つは、外刺激動機であり全回答件数の27.2%を占め、その中には、体験、肉親が医療関係者である者、モデルへの同一視等が認められた。また他の一つの動機として、全回答件数の70.8%を占める内在動機がみとめられ、その中で多く認められた項目として、職業として看護を選んだもの、生き方、興味対象としての看護などが挙げられていた。このように、看護を学ぶ動機には多彩なものがあり、個人差があることが認められた。

さらに、この多彩な動機から、特に多くの学生の、看護を学ぶことを決定する事に大きくかかわる動機として、職業と人間に焦点が当てられているということが明らかにされた。職業については、分類された項目の中で最も多くの学生から動機として挙げられ、全回答件数の30%、全回答者数の52.1%を占めていた。また、全体を通して見たとき、多頻度に挙げられた人間を焦点とした回答は、全回答件数の27%、全回答者数の57%を占めていた。

この結果より、本学学生の動機を育み、強化するためには広く人間について学ぶ事と、専門職業人として、ベースを支える知識、遂行するための技術、および価値観、倫理などの態度を形成していくための学びに関する教授-学習が重要であることが示唆された。

### キーワードズ

入学 動機 看護学生 看護大学 実態調査

## I. はじめに

教育の中心となるのは学生である。効果的な学習活動を行うためには、学生の入学動機や教育実態に対する意見を考慮する必要がある。教育者である Cantor, N. が指摘しているように<sup>1)</sup>、教師は教授-学習過程において、個人を理解することに基本的な努力を払い、

学生の問題、感情および関心を重視し、さらに学生の積極的、能動的な力を引き出すことが重要である。

このような事から、効果的な教育を行うためには、学生の“今”を知ることが必要である。具体的には、学生の感性、学ぶにあたっての動機、関心、感情を知り、それらを大切に育てていく教育を重視することである。

ゆえに本学への入学生が何を想い、何によって看護を目指したのか、つまり、看護を選択し、決定する際

\* 聖路加看護大学

の動機の特徴、およびどのような傾向をもった学生集団であるかを入学時のアンケート調査から分析を試みた。

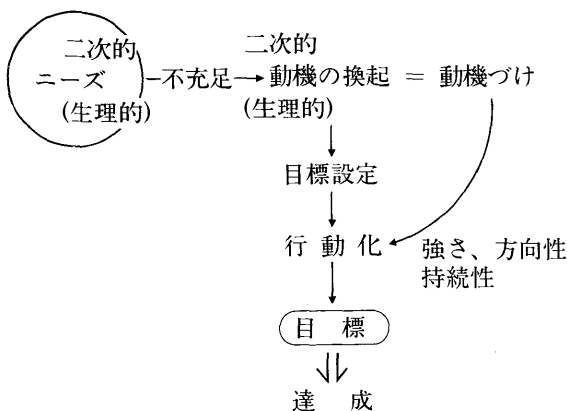
## II. 動機について

ニーズを充足するために動機が喚起された状態が動機づけという。ここで言う動機とは、人間が持つニーズを充足するための行動の原動力であり、行動の強さ、方向づけ、持続力を決定するものと定義できる。そしてまた、ニーズに対応して生理的動機と二次的動機とが認められる。この内、学習や職業選択にかかわる動機は、安定、承認、自己実現、学習のニーズから喚起される二次的動機である。

動機づけにより、目標が設定される。この目標にむかって行動が起こされるが、この行動の強さ、方向、持続性に、動機づけは大きく関係している。言い換えると、動機づけにより目標を目指していく行動が変化していくといえる。(図1) また、行動から見た場合、ひとつの行動を起こす動機はひとつとは限らず、いくつかの動機がからまりあい、行動がおこっている事が多い。

また、動機と学習との関係は次のように言える。学習の機会に、その個人が持つ動機づけおよび目標がポジティブに保証されることにより学習効果はあがる。

図1 動機とニーズ・行動・目標の関連



## III. 研究の概要

### 1. 研究目的

学生が本学看護学科で看護を学ぶことを選択、決定した動機を知り、その集団特性を明らかにすることにより、本学における効果的な教授—学習活動を行うた

めの資料とする。

### 2. 研究目標

- 1) 本学学生が、看護を学ぶことを決定した動機を明らかにする。
- 2) 動機を分類し、集団特性を把握する。

### 3. 研究対象

研究対象は、本学に昭和58年度から昭和63年度までの6年間に入学した第1学年330名である。その内訳は、昭和58年度入学者(以下58年度入学生とする)年令幅18歳から24歳、平均年令18.31歳の55名、昭和59年度入学者(以下59年度入学生とする)年令幅18歳から23歳、平均年令18.29歳の55名、昭和60年度入学者(以下60年度入学生とする)年令幅18歳から25歳、平均年令18.84歳の55名、昭和61年度入学者(以下61年度入学生とする)年令幅18歳から27歳、平均年令18.45歳の55名、昭和62年度入学者(以下62年度入学生とする)年令幅18歳から23歳、平均年令18.35歳の54名、昭和63年度入学者(以下63年度入学生とする)年令幅18歳から20歳、平均年令18.32歳の56名であった。

### 4. 研究時期

昭和58年4月から昭和63年5月にかけて、本学入学後、看護学原理の講義初日にアンケート調査を行った。(年度により実施日の多少の変動はある)

### 5. 研究方法

#### 1) 調査方法

調査は、学生の入学動機、期待、抱負、生活状況などを含んだ多目的な質問紙を用いたアンケート調査法であり、記名による自由回答方式をとった。このうち今回は、本研究の目標を達成するために、“看護を学びたいと思ったのはなぜですか”という看護を学ぶことを決定するにいたった動機に焦点をあて、分析した。

#### 2) 分析方法

##### ① 動機を表現した記述を抽出

看護を学ぶことを決定するに至った動機を自由回答方式で記述されていたものから、動機を表現した言葉を抽出し、一要素—内容に細分化した。

##### ② 動機の分類および名称つけ

抽出した記述を類似した内容毎に分類し、名称をつけた。

##### ③ 妥当性の検討

分類および名称の妥当性を研究者4人で検討し、決定した。

#### ④ 総回答件数

複数回答は、内容によって分類し、一要素一内容を1件とした結果、総回答件数は802であった。全体としては、総回答件数に占める割合で分析し、年度毎の比較は各年度の学生のそれぞれの総回答件数に占める割合で表し、分析を試みた。

### Ⅶ. 研究結果および考察

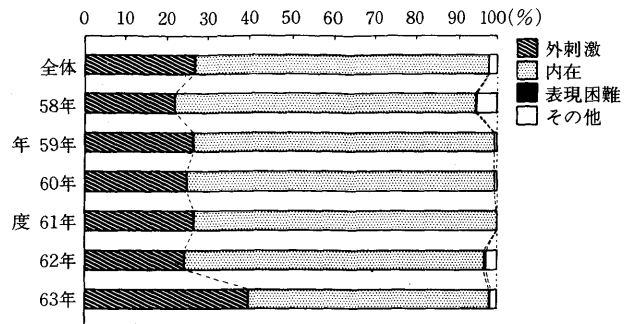
アンケートの回収率は100%であった。また、総回答件数は802件で、その内訳は、58年度入学生153件、59年度入学生139件、60年度入学生132件、61年度入学生123件、62年度入学生134件、63年度入学生121件であった。そしてその結果、全体の分類としては、大きく2つの項目に分けられた。

#### 1. 外刺激動機と内在動機の割合

学生が看護を学ぶことを決めた動機には、外部に直接行動を起こさせるきっかけになるような刺激が存在した場合（以下外刺激動機とする）と、その人の内的な感性、考え方、価値、倫理など内在している想いから発生したもの（以下内在動機とする）に大きく2つに分類された。また“よくわからない”など自分の動機を表現することが困難だったものを表現困難、解釈不能であったものをその他とした。

その割合は表1・図2に示すように、全体では27.2%

図2 動機分類



が外刺激動機であり、70.8%が内在動機であった。割合からいうと、看護を学ぶにいたった動機は、本人の内在するものから発生したものが多くわかる。年度別に見ると、ほぼ同数の割合で25%前後であるが63年度入学生だけが1.6倍の39.7%を占めていた。

表現困難な者は3人おり、110人に1人つまり、2学年に1人は明確な動機を表現できない学生がいることを示している。個人差はあるが、看護を学ぶ動機を明らかに表現できないまま、看護の学習を継続することは難しい事であると考えられる。表現ができないだけなのか、本当に明確な動機がなく看護を学び始めているのかでも状況は変わってくるが、その後の成長を注意深く見守りたい項目のひとつである。

表1 看護を学ぶことを決定した動機

項目	入学年度		58年度		59年度		60年度		61年度		62年度		63年度	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
I. 外刺激動機	218	27.2	34	22.2	37	26.6	33	25.0	33	26.8	33	24.6	48	39.7
体験(入院, ボランティア)	97	12.1	15	9.8	15	10.8	14	10.6	16	13.0	13	9.7	24	19.8
肉親が医療関係者	49	6.1	9	5.9	12	8.6	11	8.3	5	4.1	5	3.7	7	5.8
モデルの存在	42	5.2	3	2.0	3	2.2	6	4.5	8	6.5	12	9.0	10	8.3
あこがれ	17	2.1	5	3.3	4	2.9			4	3.3	2	1.5	2	1.7
他者からのすすめ	8	1.0	2	1.3	2	1.4	2	1.5			1	0.7	1	0.8
看護婦不足の現状	3	0.4			1	0.7							2	1.7
適性検査	2	0.2											2	1.7
II. 内在動機	568	70.8	110	71.9	101	72.7	98	74.2	90	73.2	96	71.6	70	57.9
職業として	248	30.9	53	34.6	37	26.6	45	34.1	36	29.3	46	34.3	31	25.6
生き方として	84	10.5	18	11.8	21	15.1	10	7.6	20	16.3	10	7.5	5	4.1
興味対象として	122	15.2	15	9.8	28	20.1	21	15.9	16	13.0	24	17.9	18	14.9
自分のため	63	7.9	10	6.5	10	7.2	10	7.6	11	8.9	10	7.5	12	9.9
手段として	39	4.9	11	7.2	4	2.9	11	8.3	5	4.1	5	3.7	3	2.5
学問として	9	1.1	3	2.0	1	0.7	1	0.8	2	1.6	1	0.7	1	0.8
III. 表現困難	3	0.4	1	0.7							1	0.7	1	0.8
IV. その他	16	2.0	8	5.2	1	0.7	1	0.8			4	3.0	2	1.7
総数	802		153		139		132		123		134		121	

図3 外刺激動機要素が全体にしめる率

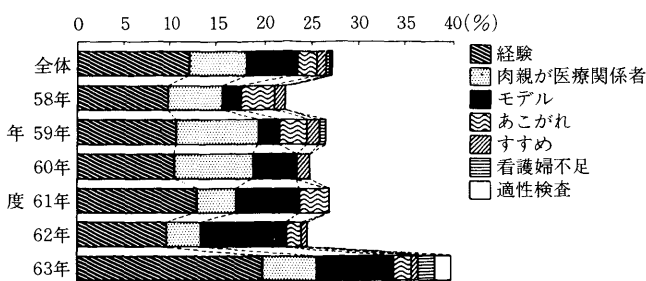
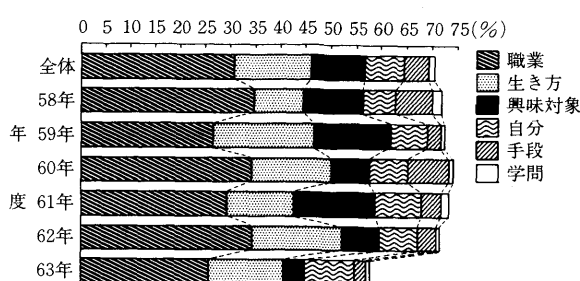


図4 内在動機要素が全体にしめる率



## 2. 外刺激動機

外刺激動機の内訳は表1・図3に表されている。全体では、身内、自分の病気や入院、ボランティア体験などの何らかの体験から動機づけられたもの（以下体験とする）が12.1%と一番多く、肉親が医療関係者であるもの（以下肉親が医療者とする）6.1%、ナイチンゲール・マザーテレサや、看護婦である母親、出会った心ひかれる看護婦など、モデルへの同一視（以下モデルの存在とする）5.2%、小さいころからのあこがれ（以下あこがれとする）2.1%、他者、特に肉親から看護を学ぶことをすすめられたもの（以下他者からのすすめとする）1%、看護婦不足の現状を知って看護婦になろうとしたもの（看護婦不足の現状とする）0.4%、および適性検査で看護婦に向いていると結果がでたもの（以下適性検査とする）0.2%であった。年度別に見ると、63年度入学生の中に体験を上げているものの割合が多く、この体験とモデルが外刺激動機の割合の多くを占めていると思われる。また、モデルの存在を動機とするものが年々増加してきている傾向が認められる。63年度入学生になって初めて適性検査の結果という項目がでてきた。これらのことから、身近な体験をもとに、目標を決定する傾向があるとも言える。その反面、実際の経験に感動することが薄いといわれる現代学生であるが、この調査結果からは、感動というような主観的な体験も動因となっていることが明らかになった。

## 3. 内在動機

内在動機は外発的な働きが、内在的なものへと転換することから明らかに分類することは困難な点も多い。が、ここではその人の内在的なものからでてきた動機を、看護をどのような視点でとらえたかによって分類してみた。その内訳は表1・図4の様になった。全体では、看護を職業としてとらえ、学ぶことを選択したもの（以下職業とする）が30.9%と最も多く、

ついで生き方としてとらえたもの（以下生き方とする）15.2%、興味対象としてとらえたもの（以下興味対象とする）10.5%、看護を学んでおく将来何らかの意味で自分のためになるとするもの（以下自分のためになるとする）7.9%、なんらかの手段のために看護を学ぼうとするもの（以下手段とする）4.9%、看護を看護学・学問としてとらえ学ぼうと思ったもの（以下学問とする）1.1%であった。これを年度別にみると、職業として看護をとらえるものが一番大きな割合を占める点は共通しており、全回答件数に対して25~35%を占めている。これに対して生き方、興味対象、自分のためは、年度毎にその順位が入れかわっている。58年度入学生では興味対象、生き方、自分のための順であったものが60年、62年、63年度入学生は興味対象が少なく、自分のためと順位が入れかわっているのが特徴的である。

これらの内在動機をさらに下記の項目に分類した。

### 1) 職業

職業としてとらえたものの中には（表2・図5）、人間を対象とする職業だからまたは人間とふれあう職業だからとするもの（以下人間対象とする）が8.4%と一番多く、以下やりがい、生きがいがもてる職業だからとするもの（以下やりがいとする）5.0%、一生続けられる職業だからとするもの（以下一生つづけられるとする）4.6%、女性ならではの職業で、女性が自立していける職業だからとするもの（以下女性の職業とする）4.2%、免許の取得ができること、就職に有利であるからとするもの（以下有利とする）2.6%、自分にあっているからとするもの（以下適職とする）1.2%、等を含む。

### 2) 生き方

生き方としてとらえたものの中には（表3・図6）、人のために役立ちたいから看護を選ぶとするものが10.5%と一番多く、難民のために何かをしたいとする

表2 職業として

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
人間を対象とする仕事	67	8.4	16	10.5	11	7.9	13	9.8	9	7.3	9	6.7	9	7.4
やりがいのある仕事	40	5.0	10	6.5	7	5.0	8	6.1	4	3.3	5	3.7	6	5.0
一生続けられる仕事	37	4.6	9	5.9	6	4.3	6	4.5	5	4.1	7	5.2	4	3.3
女性の仕事	34	4.2	4	2.6	6	4.3	6	4.5	5	4.1	8	6.0	5	4.1
有利な仕事	21	2.6	5	3.3	2	1.4	2	1.5	5	4.1	5	3.7	2	1.7
自分に適している仕事	10	1.2	1	0.7	1	0.7	1	0.8	3	2.4	2	1.5	2	1.7
人間らしい仕事	7	0.9	1	0.7			1	0.8	3	2.4	2	1.5		
社会から必要とされる仕事	7	0.9	2	1.3			1	0.8	1	0.8	3	2.2		
体を使った仕事	5	0.6			3	2.2	1	0.8			1	0.7		
医者になりたくなかった	3								1	0.8			2	
死にかかわる仕事	2		その他								1		1	
宗教に基づいた仕事	2		2.5								1		3.0	
その他(意味ある仕事)	13		4	3.3	1	0.7	6	4.5			2			

表3 生き方として

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
人の為に役立ちたい	84	10.5	12	7.8	19	13.7	14	10.6	13	10.6	15	11.2	11	9.1
難民の助けとなりたい	12	1.5			3	2.2	5	3.8	1	0.8	1	0.7	2	1.7
自立した人生を歩みたい	10	1.2			3	2.2			1	0.8	3	2.2	3	2.5
社会への貢献	9	1.1	2	1.3	3	2.2	2	1.5			2	1.5		
弱者を救いたい	5	0.6					1	0.8			2	1.5	2	1.7
その他	2	0.2	1	1.7							1	0.7		

図5 職業として

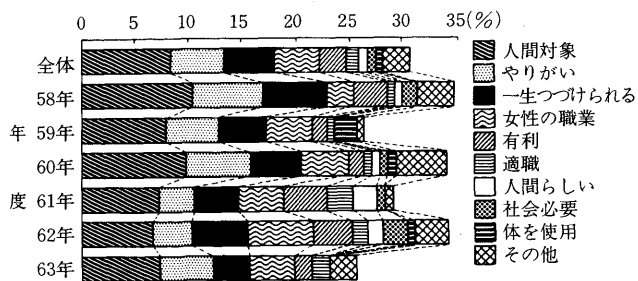
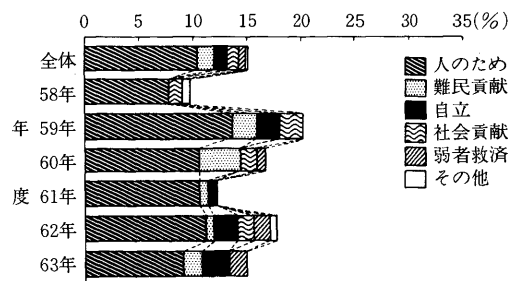


図6 生き方として



もの(以下難民救済)1.5%, 自立した人生を歩みたいとするもの(以下自立とする)1.2%, 社会への貢献をしたい(以下社会貢献)1.1%等がみられた。年度別にみると58年度入学生をのぞく他の年では、人のために役立ちたいとするものが10%前後を占め、さらに難民、弱者などを含めると、人のために役立ちたいという割合が多くなる。これは、看護が他者への奉仕という面

が印象づけられているからであろう。60年度入学生に難民救済が多かったのはちょうど進路を考える高校時代に、マザーテレサの活躍がクローズアップされたことの影響も考えられる。

3) 興味対象

興味対象としてとらえたものの中には(表4・図7),

表4 興味対象として

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
人間に興味がある	48	6.0	16	10.5	9	6.5	7	5.3	15	12.2	6	4.5	2	1.7
医療関係に興味	12	1.5	1	0.7	4	2.9	1	0.8	3	2.4	1	0.7	2	1.7
死・病気・健康に興味	9	1.1	3	2.0	1	0.7	2	1.5	2	1.6	1	0.7		
看護に興味	5	0.6			3	2.2			1	0.8	1	0.7		
その他(特定の物への興味)	10	1.2	1	0.7	7	5.0	1	0.8	3	2.4	2	1.5	1	0.8

表5 自分の為になる

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
自己成長できる	27	3.4	1	0.7	6	4.3	4	3.0	2	1.6	4	3.0	10	8.3
学んでおけば役に立つ	18	2.2	3	2.0	2	1.4	4	3.0	4	3.3	3	2.2	2	1.7
他者からの承認	6	0.7	2	1.3			2	1.5	1	0.8	1	0.7		
発展性、将来性がある	6	0.7	1	0.7	1	0.7			2	1.6	2	1.5		
学びつけられる	4	0.5	3	2.0					1	0.8				
生きるということを考えられる	2	0.2			1	0.7			1	0.8				

図7 興味対象として

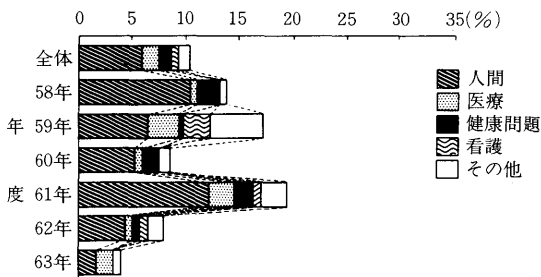
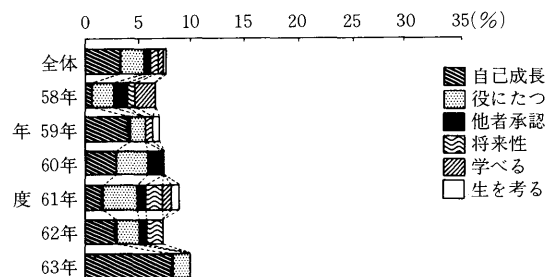


図8 自分のため



人間に興味があるから看護を学ぼうとしたものが一番多く6%で、以下、医療関係に興味があったもの(以下医療とする)1.5%、死・病気・健康に興味があったもの(以下健康問題とする)1.1%、看護への興味(以下看護とする)0.6%、その他特定の物への興味1.2%であった。年度別に見ると、興味の対象として人間をとらえるかどうかというところではばらつきがで、58年度入学生と61年度入学生が10%を越えたのに対し、63年度入学生は1.7%と少ない。58年、61年度入学生では人間への興味が他の年度に比べて強いと言えるであろう。

自己成長とする)3.4%、看護を学んでおけばいかなる時にも役に立つからとするもの(以下役に立つ)2.2%、他者からの承認等が認められた。年度別には63年度入学生の自己成長が他の年に比べて多かった。

5) 手段

手段としては、(表6・図9)とにかく看護婦(助産婦1人保健婦1人)になりたいとするものが1.9%、技術・知識を身につけるために学ぶとするものが1.2%などがあった。

6) 学問

学問として看護をとらえ、看護を学びたいとしたものは、表7の通り1.1%であった。

4) 自分のためになる

自分のためとしているものの中には(表5・図8)、看護を学ぶ動機として自己成長としているもの(以下

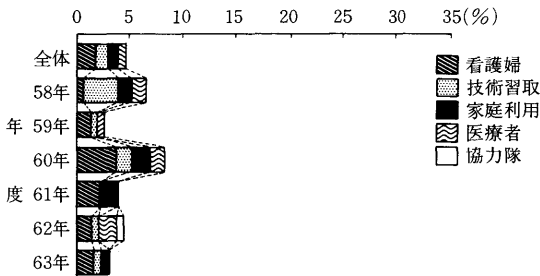
表6 手段として

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
看護婦になりたい	15	1.9	1	0.7	2	1.4	5	3.8	3	2.4	2	1.5	2	1.7
技術・知識を身につける	10	1.2	5	3.3	1	0.7	2	1.5			1	0.7	1	0.8
家庭で役に立つ	7	0.9	2	1.3			2	1.5	2	1.6			1	0.8
医療従事者になりたい	6	0.7	2	1.3	1	0.7	2	1.5			1	0.7		
海外青年協力隊になりたい	1	0.1									1	0.7		

表7 学問として

入学年度	全体 N=802		58年度 N=153		59年度 N=139		60年度 N=132		61年度 N=123		62年度 N=134		63年度 N=121	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
学問としての看護	9	1.1	3	2.0	1	0.7	1	0.8	2	1.6	1	0.7	1	0.8

図9 手段として



#### 4. 全体を通して

以上のように、分類した項目からみると、最も多くの学生が動機として選択しているのは、職業としての看護であることが明らかになった。さらに、全体を通して見た時に、人間を焦点とした動機が、多く挙がってきていた。このことから、“職業”と“人間”ということが看護を学ぶことを決めた動機の鍵であるように思う。

##### 1) 動機と専門職としての教育

職業として看護を選んだものは、全回答件数に占める割合からみても30.9%、全回答者数からみても52.1%と最も多く、学生の職業意識が強いことが伺える。実際これは看護や医師など医療系の大学に特異的な志望動機になるのではないだろうか。医療系の大学は、大学教育と共に、職業教育つまり、専門職業人としてのベースとなる知識、目的具現のための技術およびそれらを支える専門職としての価値観や倫理観などを育てる教育を含むと言える。そして、学ぶことを選

択する段階（受験決定時）ですでに卒業後の進路が決まりやすく、学ぶ目的、目標がはっきりしやすいという特徴があるということが言えるだろう。これは他の分野の大学ではあてはまらないことが多い。一般には、大学に進学する者が、これといった目的を持たずに進学し、社会にでることを遅らせるいわゆるモラトリアム人間<sup>9)</sup>であることを許される時代である。つまり、大学は職業選択の猶予機関となっているといえよう。そのような中で、看護大学においては、職業意識を持つことを要求される。実際50%を越える学生は、入学動機として職業としての看護をあげている。このような学生にとっては、現在行われている職業教育を含んだ看護教育はその動機を強化する方向に働くであろう。しかし、はっきりとした動機を持たない学生には、方向が定まっていることは、入学後看護を学び始めてから、自分の選択した道が誤った道なのではないかと思うときに、進路変更が困難なことから、学び続けることに対する不安が起こりうる。このような学生に対しては、学びの中で新たに動機づけしていくことが必要になると思われる。なぜならば、看護を学ぶ、看護婦になるという漠然とした目標はあるが、そこに到達するための原動力、すなわち動機が弱いと、動機がもたらす行動（この場合は学習にあたる）の始動、正しい方向づけ、持続力に欠けるという状態になると考えるからである。それと共に、学生が動機づけられるのを待つこともまた、必要となってくると考える。

このように、動機を持っている学生に対しても、動機が弱い学生に対しても、入学時の動機をさらに学ぶことの必要性、学び続ける動機へと強化していく必要がある。つまり、なぜ自分は看護を学ぼうと思ったの



かということを常に自分に問い返し、自分が他者の命を預かる専門職になるということ、看護教育には専門職として持つことが要求されている知識、技術、態度（含む倫理）を身につけるという職業教育が含まれていることおよび、そこから自分は何を学んで行きたいのかを自覚することが必要なのであり、学生達が主体的に、自ら学ぶという姿勢の重要性が指摘される。しかしまた、一部の学生は、そのために時間を必要とするであろう。

実際の学生を見ていると、抽象度の高い概論を学んでいる時よりも、看護を学んでいると実感できる実際の技術に関する学習になると生き生きとしてくる学生が多い。実践的な教育を早い時期から行うことの有用性が職業意識の高さからも、学生の動機の強化の意味からも、そして実際の学生の態度からも、うかがわれる。

## 2) 人間への関心と教育

内動機の中のどのカテゴリーにおいても、人間についての回答が大きい部分を占め、なおかつ、人間が対象の職業であること、人（弱者、難民を含む）ために役立ちたい、および人間への興味の回答を合わせると、全回答件数の27%、全回答者数の57%をしめることになる。今回の調査を通し、高い割合で学生は看護を学ぶ動機として“人”ということに焦点をあてた回答をしていると言えよう。このことから人間とはどのような存在なのだろうか、どのように人間をとらえていけば良いのであろうか、人間を対象とした看護とはどのようなものなのだろうかといった教育が、学生の動機を大切にすることになり、効果的な教授—学習活動となる。

## 3) 他校との比較

看護学生の入学動機に関する調査<sup>4)5)6)7)</sup>を見ると、調査方法および分類方法が異なり、明らかな比較は困難ではあるが、共通しているのは職業意識の高さであった。その内容をさらに細かく分析してみると、他校において入学動機の大きな割合を占めていたのは、経済的自立ができることおよび、資格を取得すると有利であるであった。（全回答者に対してほぼ40~50%）それに対し、本学学生は、人間を対象とする職業だから、生きがいがある職業だからという動機が多く、経済的自立、免許の取得を挙げているものの全体に占める割合が、きわめて低かった。このことと、本学学生の就職継続期間との関連も興味ある事である。

また、時代的な特徴をあげた研究として永田らにより、戦前では進路選択の一番の動機であった社会への貢献、人の役に立つということが、戦後は社会の中で

自立し、自己主張するとなり、1981年の学生は個人的生活を豊かにするためと変わってきたという報告もある<sup>8)</sup>。

これからも、職業として看護を選ぶという傾向は、本学のみでなく現代の看護学生全体に認められる傾向であることが示された。逆をいえば、学生達が職業としての魅力を看護に感じなくなった時、看護を学ぶとするものは減っていくのではないかということも言えるであろう。

## V. まとめ

以上の研究から、以下のことが明らかになった。

1. 看護を学ぶことを決めた動機は多彩であり、大きく2分すると外刺激動機と内刺激動機が認められた。そして、これらの動機には、様々なレベルがあり、それぞれがバラバラに存在するのではなく、複数の動機が複雑に絡み合い、個人の動機を形作っていた。
2. 項目に分類してみると、看護を職業として選択し、学ぶことを決めたものが多く、全回答件数の30%であった。全回答者数に占める割合はもっと高く、52.1%であった。
3. 人間を焦点として、看護を学ぶことを決めたものは全回答件数の27%、全回答者数の57%を占めた。

これらから、人間についてと、専門職業教育に関する教授—学習が、学生の動機を育み、強化するためには、重要であるということが示唆された。

## VI. おわりに

本学学生が、入学当初、看護の学習を開始する前に、なぜ看護を学ぶことを選んだのかということを決定的にかかわった動機の実態を現状報告した。個々の学生を把握するために行っていたアンケートであり、自由記載の複数回答であったために、それぞれの動機がその学生にとり、最大の動機であるとは限らず、その重要性、重さを考慮することはできなかった。今後の課題としては、これらのような動機を持った学生達がどのような成長をしていくのか、縦断的な研究を行っていく必要があろう。

学生の動機が生かされる教育の必要、および教育を考えていく上で、その中心となるのは学生だという事を述べたが、現状においては、その学生の個性や特性、興味などに考えがおかれていることは少ないのではないだろうか。教育機関を卒業後、実際の職場での実践力を備えた看護婦が求められており、実際、学ばねばならない情報量が医療、機器、看護等の発達と共に激増し、多様化してきている。そのためにも、最低でも

これだけは教えておかなければならないという、教える項目が中心のつめこみ教育になりがちな現状がある。これは大学だけではなく看護教育全般にいえることであると思う。その結果、ゆとりのない、やらされているという思いの強い学習になる。興味のない、積極的な取り組みでない、つまり自分の中に動機をもたないものをつめこまれることの学習効果は期待できないといえるであろう。このようなことから、学生が興味を持って効果的に学習できるよう、いかに学生がもっている動機を生かして、積極的、能動的な学習能力を育むかということに、この研究を生かしていきたい。

また、学生達には動機を持つことを望むが、年代的にも、アイデンティティの確立されていないモラトリアム人間が、看護学生の中にも増えてくることが考えられる。このような学生に対しては、自分について考えるチャンスを与えるとともに、アイデンティティが確立し、動機づけられること、すなわち学生の成長を待つことも必要となるであろう。

入学動機は、看護を学ぶうえでの起動力のような物であり、看護を学び続けて行くためにはそれらの動機を大切に育み、さらに学習の必要に関する動機として強化して行くことが重要である。

## 引用文献

- 1) 波多野梗子：看護教育のめざすもの、看護教育、27：8、473、1986-7。
- 2) 藤永保他編：新版心理学事典、平凡社、621、1983。
- 3) 小此木啓吾：モラトリアム人間の時代、現代のエスプリ、213、91-116、1985。
- 4) 伊藤暁子他：看護学生の生活と看護教育に対する考え方、看護実践の科学、18-42、1987。
- 5) 馬場陸子他：第一回生の入学時の進路選択動機と職業観に関する調査、大阪府立看護短期大学紀要、2：1、69-77、1980。
- 6) 福崎哲：看護学科学生の“就学”に関する調査リポート—京都大学医療技術短期大学部の場合—、看護展望、10：13、83-89、1985。
- 7) 藤原ヤスエ：看護学生の看護認識とその背景、第9回日本看護学会教育分科会誌、52-55、1978。
- 8) 永田忠夫：看護教員と看護学生の職業観のちがいに ついて、愛知県立看護短期大学紀要、14号、65-75、1982。

## 参考文献

- 1) 岩田龍子：学生達が目を輝かすとき、現代のエスプリ、213、166-181、1985。
- 2) 隅谷三喜男：現代の学生と大学、現代のエスプリ、213、35-50、1985。
- 3) 東洋編：教育心理学講座1 教育の心理学的基礎、朝倉書店、1987。
- 4) 永田忠夫：看護婦という職業を選択した要因について、愛知県立看護短期大学紀要、13号、65-75、1981。
- 5) 永野重史、依田明：教育心理学入門、新曜社、1986。
- 6) 波多野梗子：看護教育のめざすもの、看護教育、27：8、472-482、1986-7。
- 7) 藤永保他編：新版心理学事典、平凡社、620-624、1983。
- 8) マズロー A.H., 小口忠彦訳：人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ、産業能率大学出版部、1987。
- 9) メドニック S., ポリオ H., ロフタス E., 八木晃訳：新訂教育心理学入門 学習、岩波書店、1980。
- 10) 山下俊郎、澤田慶輔：教育心理学、光生社、1973。

(昭和63年11月19日受理)

## A Study of Students' Motivation for Selecting a Nursing Program

Junko Saigo, Ikuko Iwai  
Kikuko Ohta and Hanako Misao

Students' initial motivation before entering school seems to be an important factor to study effectively for four years college life. The curriculum need to meet the need of each student for study. It is also necessary to estimate the individual's motivation at the beginning of college life. The purpose of this survey was to inquire into the motivation of students for studying nursing just after entering the college.

During six years from 1983 to 1988, each student was asked to fill out questionnaire about reasons for selecting to learn nursing (as her career). Total number of students were 330 and all were women. The response rate was 100%.

The questionnaire includes multiple choices of answers. Therefore, the total number of responses were 802. The content analysis of the questionnaire was conducted subsequently. As a result of content analysis, two major categories of motivation were found. One was external motivation (27.2%) and another was internal motivation (70.8%). If the students were motivated by external stimuli, e. g. having a modeled person in their life experience and in their surroundings, this case was categorized into external motivation. For the internal motivation; it was defined that the students were motivated from internal sources such as value, interest, and their thinking process to choose to study nursing as their occupation and career. The internal motivation were classified into two primary motivational factors. The first one was nursing as an occupational choice (30% of total number), and the second one was an interest in people as a central focus of nursing (27% of total number).

The result suggests that learning about human nature broadly is as important for effective teaching-learning process as the attitude, skill and knowledge of professional nursing.

### Key Words

*entering school*  
*motivation*  
*nursing students*  
*school of nursing*  
*survey*